

第47歩

啓蟄(けいちつ)

3月の季節感を表す言葉として「啓蟄(けいちつ)」という言葉が好きです。二十四節気の一つで、土の中で冬ごもりしていた虫が地上へ出てくる頃を言うと言われてます。今年3月5日がそれに当たります。難しい漢字ですが、啓は「ひらく」、蟄は「土の中で冬ごもりしている虫のこと」を表しています。「啓蟄」と書いてあるのを見ただけで、春の暖かさに虫が蠢(うごめ)いて地上に顔を出しそうな様子が情景として浮かんできませんか。そして、出てきた幼虫が羽化して空中に飛び出し、花に止まって蜜を吸う。「ちょうちょ、ちょうちょ、なのはにとまれ」の世界です。一挙に春めいた気分になります。

「なのは」といえば、私の好きな与謝蕪村の有名な句を思い出します。

「菜の花や 月は東に 日は西に」

この句は、蕪村が、現在の神戸市灘区にある六甲山地の摩耶山(まやさん)を訪れたときの句だとされています。菜の花の時期、茜色した西の空に夕日が沈むころ、眼下には、一面の黄色い菜の花。月と太陽のある天と、菜の花と蕪村のいる大地とが一体化したような蕪村らしい雄大さが持ち味の句です。

この季節の蕪村の句で言えば、

「春の海 ひねもすのたり のたりかな」も忘れるわけにはいきません。いかにも、瀬戸内海の情景だなあと思っていたのですが、残念ながらこの句は、天橋立辺りの丹後の海を思い浮かべて詠んだと言う説が強いようです。ひねもすとは「終日」のことで、意味としては、「春の海には、波が一日中ゆっくりゆっくりと寄せ返していることだなあ」となります。「春の海」といえば、お正月によくかかるお筆の名曲が知られていますが、こちらは作曲者の宮城道雄が瀬戸内海を旅行した際の印象を織り込んで作ったもので間違いありません。

今年、瀬戸内海が日本で最初の国立公園に指定されてから90周年を迎える記念の年です。指定をされたのは昭和9年3月16日。季節は啓蟄を過ぎたまさに春。その日に黄色い菜の花が咲いている丘から見た瀬戸内海はきっと、「ひねもすのたり」していたに違いないと勝手に想像しています。

